

―岡垣の歴史と風土①―

木綿間山（湯川山）のこと

岡垣歴史文化研究会 石井 邦一

標高471・4メートルの湯川山は、その北山麓を、波津と宗像市鐘崎との境界である黒崎鼻まで延ばし、響灘の海に貫入している。

この山は地理的には、宗像市と岡垣町の境界を作る最も南域の城山（葛ヶ岳）・金山・孔大寺山につながる孔大寺山系の、連山の北端に位置する関門層群の山々で、太古には火山活動をした山々である。

湯川山はこの山系の北端で、唯一、海に接している。南側の山腹はかなり急峻だが、山頂から北側はなだらかな斜面が広々と山麓まで続いている。

また山頂から胸高ほどの高さの土手が、下の麓まで延々と続き、これが馬牧の領域で馬止めの土塁である。

響灘に面したこの山の牧は、馬の飼育に大事な塩分が、潮風充分に供給され、牧野が広いだけに牧草も豊かで、山間の溪流

には、石を積んで堰をつくった水場も今に残っている。

しかし何よりも馬の運動に必要な、緩やかな傾斜で広々とした山麓の情景は、この牧が源平合戦の折、宇治川の戦で活躍した名馬摺墨の生まれ里であったことも、あらためて納得したい。

この湯川山が、かつては木綿間山と呼ばれていたことは、今では忘れられている。

そこで、この山名について書かれた古書を、尋ねて見よう。まず、『筑前国統風土記』の記述を見ることにしたい。

この書は、江戸時代前期の福岡藩の儒学者だった貝原益軒が、元禄十六年（一七〇三）に著したものであるが、これに書かれている記述を紹介する。

「初ノ浦の西の高き山を湯川山と云。宗像郡鐘崎との境也。此山の谷にむかし温泉有。此山をゆわう丸山とも云。是木綿間山をよこなまりて云か。木綿間山は萬葉の歌によみたる名所也。湯川山は遠賀郡に属せり。又此山にむかしは馬の牧あり。山より西の方に牧大明神の社あり：」（卷十四遠賀郡・上から）ここに書かれている「萬葉の歌」とは、『萬葉集』のことである。

この巻十四の相聞歌がそれだが、原本はまだ平仮名がない時代で、すべて万葉仮名である。

これを今様の短歌表記にすると、「戀ひつつも居らむとすれど木綿間山隠れし君を思いかねつも」となる。

歌の大意は、「恋しく思いつつとすれど、木綿間山に隠れてしまつたあなたを思い慕う心持にたえられないことです」である。すなわち古代に、東国から徴発されて、筑紫や壹岐・対馬などの守備にあたった防人が歌つたものである。

ただ、この木綿間山については、どの注釈にも住所不詳とあり、ここで云う木綿間山とはただちに断定はできない。

しかし内浦から垂水峠越えのルートは、古代からのものであり、これを岡垣の木綿間山と考へても無理はない。

以上のことから、あらためて「木綿間山＝湯川山」の諸相を考えると、それが単なる山の容姿に留まらず、その歴史的一面が伺えるような気がする。



▲手野方面から見た湯川山の全景